今日の世界の諸問題と統一思想

氏族メシヤ摂理の勝利のために掲載するこの講話は、今回ソウルで開催された第十八回ＩＣＵＳでのものです。統一思想を中心として、文先生の人類救済のビジョンが最も明確にされています。

韓国統一思想研究院院長　李相憲（이상헌）

序言

第十八回ＩＣＵＳの第六分科会に参加された教授や学者の皆様、本分科会の名誉議長として真心から歓迎致します。この分科会の開催のために、その間、いろいろな準備を導いてこられた、議長であられるルビンスタイン博士と、論文を作成された方々や、コメント文を作成された討論参加者の方々の苦労に対して、特に、深甚の感謝の意を表します。

さてここで、しばらく時間を頂いて、この分科会の主題に関連して統一思想の研究にたずさわってきたものの一人として、短いスピーチの時間をもたせていただきます。私の講演の題目は「今日の世界の諸問題と統一思想」であります。これは今回のＩＣＵＳ全体の主題である「絶対価値と現代世界の再評価」とも通ずる題目でもあります。

本論

一　大変動期を迎えた世界

この数年間に世界は歴史的な大変動をとげました。東欧諸国における共産主義の崩壊、ソ連における事実上のマルクス・レーニン主義の放棄、東西ドイツの統一等が実現され、四十数年間にわたった東西の冷戦が終わりを告げたのです。そして今、目前に迫ったヨーロッパの統合に象徴されているように、人類は、長い間の悲願である人類一家族世界の実現を待望しているのです。

しかし突如として勃発した湾岸戦争は、我々の記憶にまだ生々しく残っています。また共産主義の理想を失った社会主義諸国は、行くべき方向性を失ったまま、経済破綻や民族紛争によって危機的状況を迎えています。そして先進国の繁栄の陰で、アフリカでは二千万人が飢えに直面しています。さらに世界的に、性道徳の退廃と家庭の崩壊はますます深刻さを増しています。これらの問題が解決されない限り、人類の理想を実現することは不可能です。

ところで今日までのいかなる宗教も、いかなる思想も、これらの問題を根本的に解決できませんでした。共産主義も、搾取のない、自由で豊かな地上天国の実現を目指しましたが、結局はその理想を実現できませんでした。

そして今、文鮮明先生が、これらの問題を根本的に解決し、全人類の共存共栄の社会、地球村一家族世界の実現を目指して、統一運動を推進されています。統一運動は資本主義、社会主義を越えた統一世界を実現しうる新しい理念として大きな期待を集めています。

そこで今、世界が直面している問題のうち、民族問題、宗教問題、共産主義問題、南北問題、倫理問題等を取り挙げながら、統一運動は、いかにしてこれらの問題を解決しようとしているかを紹介します。さらに統一運動の理念である統一思想の役割についても言及しようと思います。

二　民族の対立と宗教の対立

現在、ユーゴスラビアではスロベニア、クロアチア共和国と、セルビアを中心とした連合軍が衝突し、危機的状態が続いています。ソ連においても、ペレストロイカの始まりとともに、長い間、抑圧されてきたバルト三国、リトアニア、ラトビア、エストニアが、先頭を切ってソ連から独立を図りました。湾岸戦争において、イラクは多国籍軍に屈伏しましたが、それと同時に、イラク国内におけるクルド人の苦難が世界の注目を集めました。

しかしこれらは、ほんのわずかの例にすぎず、世界中いたる所で民族の対立が見られます。そして、このような民族と民族の対立をさらに深刻なものにしているのが宗教の対立です。湾岸戦争には、アラブとイスラエルの宗教的対

立が大きな影を落としていました。このように、民族の対立と宗教の対立が複雑にからみ合いながら、世界中で紛争が起きているのです。

ここでアジアに目を向けるとき、最も特殊な関係にあるのが韓国と日本です。日本はアジアにおいて最先進国であり、いち早く西洋文明を取り入れて消化したチャンピオンであり、今や西洋世界をしのぐに至っています。しかし日本は、かつてアジア諸国を侵略し、支配した加害者であって、韓国をはじめ、中国、フィリピン等、日本に対する恨みと警戒心による不信の風潮は、今もなお根強く残っています。したがって、もし韓国と日本において、今までの不信の関係から真に友好関係が築かれるならば、それは世界の民族紛争の解決の一つのモデルケースになるに違いありません。

統一原理を解明された文鮮明先生

そのため今こそ、民族と民族が和解し、宗教と宗教が和解しうる統一的な思想が現れなくてはならないのです。統一運動は、宗教を統一し、思想を統一しうる普遍的な愛の思想を掲げながら、まず地域共同体（例えばアジア共同体）の実現を目指し、さらに地球村一家族の実現を目指しています。

三　共産主義問題

ソ連・東欧では事実上、マルクス・レーニン主義は崩壊しました。そして今、経済は破綻状態にあります。ソ連では民族紛争や改革派・保守派の争いが漸次拡大しつつあり数日前にはついに保守強硬派が政変まで起こしました。それで、ゴルバチョフ大統領のペレストロイカも大試練にさしかかっています。

今、ソ連は西側諸国からの経済援助を切望しています。しかし、ソ連経済をブラックホールにたとえる人がいます。これはいくら援助をしても、その効果がほとんど期待できないということを意味するのです。

このようなソ連経済の病弊の根本原因は、ひとえに、マルクスの「資本論」的思考にあります。それは七十年以上、しみついたものであって、一朝一夕に抜けだすことはできません。「資本論」によれば、商品の価値は労働時間の長さによって決定されるものであり、そこからは消費者のためにという発想は生じません。

また、流通過程は新しい価値を生まないということから、流通の軽視が生じます。さらに、機械や設備等も新しい価値を生まないということから、技術革新の決定的な遅れが生じています。結局、ソ連は「資本論」に代わる新しい哲学と経済学を受けいれないかぎり、根本的に経済を立て直すことは困難です。これはソ連のみならず東欧や中国にも共通したことです。

ところでご存じのように、文先生は二十数年前より国際勝共連合を設立され、今日まで共産主義に反対する先頭に立ってこられました。しかし今、ソ連は文先生と統一運動を受け入れるようになりました。その決定的な契機となったのが、昨年四月、モスクワで開かれた言論人会議での文先生とゴルバチョフ大統領の会談でありました。長い間、共産主義の敵の頭目とみなしていた文先生を、なぜゴルバチョフ大統領は歓迎したのでしょうか。その前に、ゴルバチョフ大統領は文先生の勝共運動の内面を徹底的に調査してみたのです。その結果、統一運動は共産主義を滅ぼそうとするものではなく、かえって暴力と独裁という誤った共産主義からソ連を救うためであるということが分かり、このような会議や会談が開かれるに至ったのです。

ゴルバチョフ大統領との会談のとき、文先生はソ連を救うために次のような提案をされています。

①ソ連は神を受け入れなくてはならない。そしてそれは哲学や科学を指導しうる新しい宗教思想によらなくてはならない。

②ソ連経済体制を短期間で変えるのは困難であるから、ソ連は土地を無償で提供し、自由経済地域を作って、西側の工場を誘致すべきである。

③軍事科学技術を平和産業に移転すべきである。

そしてソ連はこのような提案に呼応して、多くの学生、教授、政治家等をアメリカや日本に送って、そこで文先生の統一運動の理念を学ばせているのです。この理念を学んで、共産主義がなぜ失敗したか、そして理想世界を実現しうる真なる思想は何かを初めて悟りつつあるのです。

東西の冷戦が終わった今、社会主義国は冷戦という第三次世界大戦に破れた敗戦国のような立場にあります。そこ

で第二次世界大戦に破れて国土が疲弊したドイツや日本を、アメリカが援助して復興させたように、西側諸国は経済的に破綻した社会主義国を援助して復興させなくてはなりません。これもまた文先生の主張であります。それが全人類の繁栄につながる道であるからです。

四　南北問題

今、アフリカでは二千万人が飢えに直面しており、栄養失調でどんどん死者が増加しています。国連食糧農業機関（FAO）の今年三月の特別報告によれば、アンゴラ、エチオピア、リベリア、モザンビーク、ソマリア、スーダンの六か国の被害が特に大きく、援助が遅れればさらに多くの人命が失われる状態です。ところが一方で、先進諸国においては、飽食の状態にあり、奢侈にふけっている人々がたくさんいます。

この問題をいかにして根本的に解決しうるのでしょうか？　持てる国が持たざる国に援助を行うのは当然のことですが、それは容易なものではありません。そこで文先生は、人類の食糧問題を根本的に解決するために、国際的な水産開発のプロジェクトを進めておられます。特にアフリカでは水産業は全く遅れています。やがてこのプロジェクトが成功し、水産業が世界的に発展するようになるとき、アフリカをはじめ人類の食糧問題は解決するでしょう。

また南北の経済的格差をなくすためには、先進国から後進国へ技術の移転がなされなくてはなりません。しかし現在の国家は国益を越えることができません。他の国が自国と同等になること、またはそれ以上になることを恐れ、消極的な技術援助しかできないのです。このままでは全世界が等しく繁栄する共存共栄の世界は実現できません。

ところで技術の移転とは、先進国の繁栄を引き下ろして、持たざる国に移転しようというのではありません。低いレベルの国を高いレベルに引き上げるのです。パートナーが繁栄してこそ、自国の経済も繁栄するのです。それで文先生は世界の技術を平準化し、世界全体の繁栄を実現するために、統一運動では最先端の技術を確保し、発展させながら、それを世界に与えようと準備しておられます。それと同時に、民族、国家を越えた地球規模の新しい思想を提示しておられるのです。

五　倫理・道徳の崩壊

大統領執務室での会談の際に握手を交わす文鮮明先生とゴルバチョフ大統領(1990年4月11日クレムリン)

最後に、最も根本的な問題として、倫理・道徳の崩壊を挙げなくてはなりません。アメリカを中心とする欧米先進諸国では、行きすぎた個人主義と性の解放が謳われてきましたが、その行きつく果ては、家庭の崩壊、そして麻薬とエイズでありました。このような現象はとどまることを知らず、伝統的に倫理・道徳の確立していたアジアにも押しよせています。また規律の社会である社会主義国においても、人間の倫落の問題は押しとどめることができませんでした。

このような人間の倫落の問題に対して、欧米諸国の指導的理念であったキリスト教も、社会主義国の指導理念であったマルクス主義も、結局は何も解決できませんでした。

これは人間の堕落にかかわる問題であり、この問題の本質は、男女の愛、夫婦の愛が真なるものになっていないところにあります。夫婦の愛から家庭倫理が成立し、家庭倫理が拡大して社会倫理、国家倫理へと広がっていくからです。

人間の倫落をとどめるためには、そして人類が民族的、社会的な偏見や対立を越えて人類一家族世界を実現するためには、夫婦が真の愛で結ばれることによって、家庭を愛の花園、愛の基地にすることが何よりも先決問題となって

いるのです。

真の愛は全人類に通じる普遍的なものです。貧富の差、民族の壁、人種の壁を越えるものであり、時とともに輝きを増すものです。それは永遠、絶対なる神の愛に連結されることによって初めて可能になるのです。文先生は、夫婦が真なる愛で結ばれるために、今日まで、神の祝福による合同結婚式を推進してこられました。統一教会の結婚によって築かれた家庭に愛の花が咲き、平安と幸福の基地となるとき、やがて全世界から歓迎されるようになると思います。

六 統一思想の役割

以上のような問題を解決するために、文先生は今日まで統一運動を推進してこられたのですが、その理念となっているのが、統一原理であり、統一思想です。統一原理は宗教的、神学的な教理ですが、統一思想はさまざまな現実問題に対処すべく、文先生の指導の下に哲学的に体系されたものです。

統一思想の立場からは、哲学は学問としての側面を持つとともに、実践的な側面を持つべきであるとみるのです。

すなわち哲学は、「人生問題、歴史問題、世界観の問題、政治問題、経済問題、教育問題、芸術問題、倫理や道徳の問題、神学問題、宗教問題等、あらゆる問題を根本的に解決しうる普遍妥当な思想体系」という側面をも持つべきだとみるのです。要するに、哲学とは、「学問としての真理体系であると同時に、現実的諸問題を根本的に解決しうる思想体系」であり、そういう意味で、哲学は「純粋理論であると同時に、解決理論（または実践理論）」であるとみるのです。

文先生は、今日の哲学が現実の諸問題の解決に関心を持たないでいるのを嘆いておられます。今日の哲学は、主として哲学のための哲学であるといわざるをえません。しかしこの観点は、哲学の学問的価値を引き下ろすのでは決してありません。哲学の学問的価値は、どの時代においても高く評価されなければなりません。ところで、今日の大部分の哲学が実践理論の側面を持っていないのも、おそらく事実であろうと思います。それに対して統一思想は、従来の哲学とは異なり、統一運動を推進する実践理論として、さまざまな現実的問題を解決してきましたし、また解決しつつあります。

ところで統一思想に対して、しばしば、神をあまり持ち

こみすぎるとか、絶対性を主張しすぎるような印象を受けるかもしれません。しかし統一思想は、今までの宗教や思想が現実問題の解決に無力であったのは、人間が神を失って、神の真理と真の愛を知らずに、自分の力だけで問題を解決しようとしたからだと見るのです。したがって、人間と宇宙の創造主である神がいかなる方であり、その愛がいかなるものであるかを正確に理解するということは、人間と世界の問題の解決にかえって必要なのです。

文先生は、数多くの迫害の中にありながらも、神の啓示によって、統一原理を提示されました。統一原理は啓示そのものではありませんが、文先生ご自身が受けられた啓示を解釈されたものです。そして霊界の多くの宗教教祖に、その正しさを確認してもらい、さらに神ご自身からも公認された理論です。したがって統一原理は、単なる人間の頭脳の産物では決してありません。統一思想も、その表現形式は統一原理とは差異があるとしても、その内容は統一原理と全く同じものです。そういう意味で統一原理や統一思想は、従来の思想とは次元が違うのです。

それといって、文先生は、この思想を絶対主義的、独善的方法で伝えようとする意志は毛頭、持っておられません。従来の多くの学問がそうであったように、多くの思想家や学者たちの研究や批判を通じて、多数の賛同を得ることによって、一般化させようとしておられるのです。

ところで統一思想は思想の出発点が神ですから、論理の展開の仕方が演繹的です。したがって神学的、演繹的な考え方になれない方々には、神の存在や神の属性を一つの仮説と見てもらい、自然現象や社会現象がみなこの仮説から導き出される結論と一致すれば、その時、その仮説を正説として認めてもらうようにお願いしているのです。この仮説的方法は、今日まで実際に学問（自然科学）の発展に少なからず寄与したのです。

今回、世界の著名な学者の方々が集まられたＩＣＵＳにおいて、統一思想の分科会がもたれ、哲学の各分野の第一線にあられる皆様により、統一思想が本格的に検討されるということは、文先生の思想を体系化する仕事に携わってきた者の一人として、このうえない喜びであります。今回の討論や批判は、統一思想へのより深い理解と、これからの統一思想のより一層の発展に、よい契機となることを確信いたします。どうぞこの第六分科会はもちろんのこと、今回のＩＣＵＳ全体に対しても実り多い成果があがるよう、お願いいたします。

〈完〉